

【ポスター発表】

障害者を表す語のイメージに関する基礎研究

○ 北星学園大学 豊村 和真 (000049)

[キーワード]障害者、イメージ、大学生

1. 研究目的

近年において「障害者」と表記していたところを、「害」の文字をひらがなにし、「障がい者」と表記するという取り組みが多く見られる。主要新聞においては、遅くとも1990年代に「害」の文字をひらがなで表記されたことがあり、この頃より「障害」表記に関する意識が高まりはじめていると推測される。しかし、現状では新聞のようなマスメディアにおいて、未だ「障がい（者）」を標準的な表記とはみなしていないと考えられる。一方内閣府調査では平成24年度の時点で、13の都道府県と7市の指定都市が表記を改めているとしている。このように、「障害」の表記を改める取り組みが見られるが、その変更には様々な理由があるとされる。まず、「害」の文字そのものからくるイメージの悪さを解消するためである。具体的には、「害」から連想されるイメージが悪いことや、不快感を感じる人への配慮という理由が挙げられている。また、代替する用語がないためひらがなで表記するという理由が挙げられている。さらには、変更により市民の意識向上や「障害」への理解の促進が期待されることや、「害」のイメージが偏見や差別を助長する可能性があるという指摘がなされている（平川2010）。「害」の文字をひらがなで表記する「障がい」の他に、「障碍（または障礙）」とするべきであるという意見や、「チャレンジド」などのように、英語をカタカナで表記したものなどがある。これらの語が実際にはどのようなイメージを持たれているのかについて、具体的に示すこと、またそれにより「障害者」表記を変更することが実際に障害者に対するイメージ変容にどのように関係するのかを判定するための基礎的な資料を得ることが目的である。なおイメージを研究する方法はいくつかあり、実際に複数の手法で検討したが、本報告では障害を具体的な個々のイメージと評価対象を同時にイメージマップとして布置し全体を俯瞰することができるコレスポネンダンス分析（対応分析）の結果について主として報告する。

2. 研究の視点および方法

「障害者」を表す語（以下表記と記述する）として、よく知られている語を選ぶために、内閣府による2010年アンケート結果で支持の高かった語として、高い順に「障害者」、「障がいのある人」、「障がい者」、「チャレンジド」、「障碍者」があげられているので、これらの語を使用した。又、これらの語を知っていたかどうかについての回答も求めた。

被験者は回答に不備のなかった2学科（福祉心理、経済）の大学生計174名（男性63名、女性111名）。

使用したイメージは先行研究を参考に「柔らかい」、「あたたかい」、「重い」、「純粋な」など21個の形容詞である。これら21個の形容詞について各表記ごとに「そう思う」「そう思わない」のどちらかを選択させた。

3. 倫理的配慮

被験者には本調査がすべて研究目的でありそれ以外には使用しないことを明示した。またいつでも回答を拒否できる権利があること、データの処理に当たっては個人の匿名性に配慮することなどを伝えた。

4. 研究結果

コレスポンデンス分析の結果を図1に示す。

イナーシャの寄与率は、次元1において0.89,次元2では0.89であり、2次元で97.4%を説明していた。

イメージマップから、「障害者」の付近には「重い」、「危険な」が布置していた。「障がい者」は「細かい」、「大変な」等が布置していた。「障害がある人」の付近には「あたたかい」といった形容詞が布置していた。「チャレンジド」は、「積極的な」等の近くに布置していた。

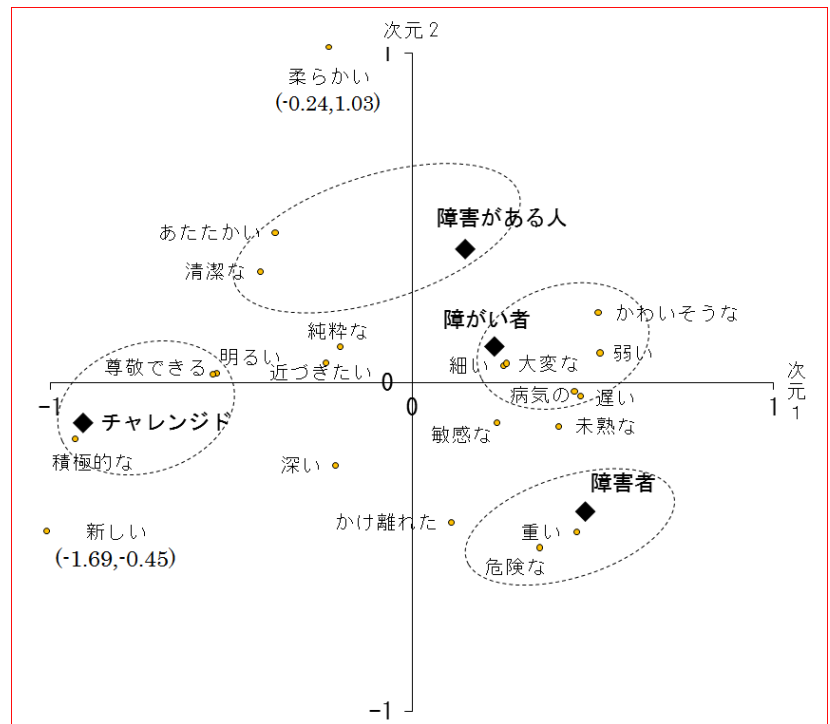


図1 イメージマップ (全体)

5. 考察

先行研究では、「障がい者」がポジティブなイメージであったが、本報告ではむしろややネガティブに感じられているように見える。手法の違いを含めてより詳細に検討する必要があると思われる。

なお、本研究は非会員の樋口花美氏、および西舘裕子氏との共同研究の一部をまとめたものである。